

# ひめつかわれる」と、心を動かすこと

川崎 徳子

## はじめに

子どもたちと一緒に生活していると、時々本当に保育者と子どもという立場を超えて、保育という空間を超えて、ひきつけられ、心を動かされることがあります。無条件に驚いていたり感動していたり笑つたり…。子どもたちの作り出す空間の中に

自分が飛び込んでいて、同じ空間の空気を吸つて、同じ時を過ごして感じ合えてる…、そんなことに浸ります。もちろんそれは、どこまでも私の追い続けている錯覚かもしれないのだけれど…。

そんな時はたいてい、こちらが思いもよらないことや想像もつかないようなことが起きていたり展開していたりしていることも多いものです。でも、そ



んな時の私は、その時を賢明に生きている子どもの姿に触れて感動します。その瞬間を過ぎて、客観的な私の世界に戻つてその場を見ると、「これは伝えた方がいいなあ」と思うことが見えてきて、慌てて保育者の自分を動かしたりするのですが…。それでも、そんな時を過ごせたことをうれしく思いながら、また子どもとの生活を考え続けます。こんな場面を外から見ていた他の人からは、「そのことをどう考えるのか?」と問われるようなこともあります。でもその時、私が確かに子どもの世界に飛び込んでいたということ、その感動の実感以上のものは、言葉に表しにくかつたり説明にならなかつたりします。でも、何よりも信じたいものだと思っています。こんなことを言葉に表す努力も必要なのだという葛藤とも向き合いながら…。

年長の子どもたちと過ごした一年の中から、このような保育者である私がひきつきけられること、目

の前の忙しさに飲み込まれそうな毎日を過ごしていても、とても大切にしたいと思っていることについて、水と砂の場で展開したことから考えてみようと思います。

### 六月 砂場から溢れた水に驚いて…

六月も後半の頃のことです。年長の保育室前的小さな庭の真ん中に砂場があります。この頃、この砂場へ水を流すのに、水道から桶を繋いで流すことを始めていた子どもたちは、この日も朝からそれを始めました。『この子どもはしつかり腰を据えてかかわらなきや』と考えていた元気のいいA男を先頭に、五、六人が黙々とそれぞれ自分の思いで砂場にかかわっています。桶を繋いでいるのはA男。二つある水道の蛇口は、全開。これまで、ほとんどの



水は桶の継ぎ目からこぼれ落ちたり、一つひとつのかずらが繋がらず、流れが途絶えて砂場まで水が届かないでいました。この日もその続きをしています。

この砂場の子どもたちを見かけられた園長先生が、他の場にいた私を捜していらして「ちょっと砂場へいってみてくれない？ 水が小学校までいきそうなんだけど…」とそつと伝えられました。駆けつけてみると、本当に砂場が池のように水でいっぱいになり、溢れて隣の小学校との境の溝まで流れ出していました。「うわー！ すごい！ 溢れてるー！」

「こんなに水が…小学校の方まで行つてるよ」と思わず声が出たその時の私は、まず、その水のたまりようと私の予想を超えた流れの方向と、これ程までに水を砂場に流しながらこの世界で没頭して遊んでいる子どもたちに、驚き感動しました。今日はなんと上手に桶を繋いだことだろうと…。本当にこの子どもたちの仕事（まさに仕事）は昨日までの姿から

するとすごいことで、これ程の水を砂場に集めた子どもたちのことをとても大事に思いました。本当はこの時の私は、この感動に暫く浸っていたかつたのだけれど、さすがに私の受け止められる限度を超えて流れている水のことにも気が付いたので、とうとう「小学校まで溢れちゃったよ、これ以上流れる」と小学校の人が困っちゃうだろうから、悪いけど、今日は水を止めるね」と声を掛けました。「えー」と、ちょっと不服を示した子どもたち。水を止めてしまふと、残念そうにはしたけれど、それぞれにまた思いを広げて散つていきました。

後で私は、今までにない水の量を子どもたちはどう感じていたのだろうかと子どものいなくなつた砂場を見つめて思いましたが…。

### 生き物は大切だけれど…

砂場から水が溢れた日、もう一つ驚いたことがあ

ります。

桶を繋げて水の流れをつくると、何かを流してみたくなるのは当然かもしれません。木片から始まつて、これまでA男は、いろいろなものを流してみると、これを続けていました。しかしこの頃、A男は自分で捕まえてきて保育室に置いていたカエルなど、いろいろな生き物を流してみるようになつていきました。

「生き物を遊ばせているんだよ」と言うA男の展開もわからなくもなく、すぐにはやめられないことも感じながら、それでもやはり生き物のことを考えて、私も、見かけられた副園長先生も「生き物はどうかしら」とA男に声を掛けっていました。砂場の水が溢れたのは、そんなことのあつた次の日のことであります。

進級当初から、あまり、友達とのかかわりに関係なく、好きな虫を探すなど、ひとりで黙々と自分のことをしていていたB男が、いつの間にかA男た

ちのいるこの溢れている砂場と水の場に加わつていたのです。それは、私には今までのB男から考えると驚くべきことでした。そのB男が、自分の可愛がっている生き物を水槽から取り出してきて、次々に流しているのです。私はこの場にB男が居ることにも驚いたし、大事にしていた生き物を持ち出してかかわつていてることにも驚きました。そして、何よりも自然にその場にいるこのB男の姿を見た時、何か無条件に感動し心を動かされました。その時の私は、こんな風にB男の姿を感じることで十分だと思ったのでした。

私はこのことを後で次のように考えました。大ことにしている生き物をもつて水の場にかかわつていたB男の居るその場に、私は引きつけられていたと思います。客観的にその場を見たならば、生き物がかわいそだというようなことも、伝えたいこととしてすぐに出でてくるのだろうけれど、この時のB男の



「うわあー、みずがでてきた！」「……おんせんかも」

世界には、それよりも大事な時間が流れ、友達とのかかわりが生まれているように思いました。水の流れをつくっている子どもたちと、その空間に居るB男にとって、この場は、生き物との関係を保ちながら、友達とかかわり、水の流れを感じて夢中になる瞬間を生み出したとても大切なものに思えました。

そして、私がこの瞬間のB男にできることは、このB男の生きている時間と空間を見て、彼らなりにこの時を生きて進んでいることを感じることで十分なんだと心の中で信じていることのように思いました。言葉で説明するに至らないほど豊かな世界に生きているのだろうと…。

### 子どもの世界の中で伝わりあつて いるもの

小学校との間の溝に水が溢れたことがあつてから何日かは、子どもたちは、溢れるまで水を流すことをおもしろがつて続けていました。私はそれを見つ



めていたけれど、やはりその度ごとに「溢れるのは水がちょっともつたいないなあ」とか、「小学校の方まで流れちゃつたら小学校がたいへんになつちゃうかもなあ」と伝え止めたりもしました。するとある時、C男が「せきとめればいいよ!」(せき止めなんて、難しい言葉をよく知つてたなあと感心!)。それからいつの間にか、砂場から水を溢れそうになると、溝に溢れいく道筋に、板を置いてせき止めるようになりました。それは、どの子どもが遊ぶ時もそうしてありました。それを見て私は思いました。大人はすぐにルールができたとか表現してもうけれども、きっとそんな堅苦しさを超えた子どもたちの世界で進んでいった場の姿なのだと…。

#### D男の場合

思いが強く、仲良しの女の子一人と遊びたくて、女の子の持つ思いなど受け入れずに強引に誘いか

け、一緒に遊ぶことにしてしまったD男。私はそんなD男を気にかけながらも一学期の半ばを過ごしていました。女の子たちのしたいことも大事にしたいと思い、暫く私は腰を入れてD男とつきあいました。「ぼくは先生とは遊びたくないんだ。先生なんかあつちへいってよ」なんて言われながら、その子を見つめて過ごしました。D男は、きっといろんな思いを巡らせながら過ごしたのだろうけれど、ある日、その彼が、虫の好きな男の子達の中に入つて一緒に水槽を眺めていて、カマキリなど生き物に興味を持つようになつていきました。そのうち、家からザリガニを持ってきて自分の水槽を置くようになりました。そして、とうとう生き物のかわりから生き物が好きな男の子の中で過ごすようになつて、ある日その男の子達が遊んでいる砂場に近づいていたのです。汚れるのを好まないでいたD男が、砂場と一緒にいるようになつていたのです。それもとて



「こうしたら、たきになるね」「うん」

も自然に。

### 三学期 穴を掘ることへ

あれから、いろんな子どもたちが砂場で過ごしました。桶を繋ぎ水の流れを砂場中につくつたり、橋を架けたりなど、いろんな子どもがかかわって、いろいろなことが起きました。直接かかわってなくて、も、友達のしていることをどこかで見ていたり感じていたりして、それぞれ自分なりにかかわっていきます。自分のかかわりたい時に…。

そして三学期になつたこの頃は、水の流れ道をつくるのではなく、穴を掘り始めました。一人が掘り始めたのを数人が手伝い、そして深く深く掘つていきます。ある日E男が「先生も手伝つてよ」と。見ると深く掘つたその下に水が溜まつてきていました。「お天気なのにどうして水があるの?」と私。E男「温泉じゃないの? 暖かいかな、触つてみよ

う。：冷たい、水みたい」。

また別の日、今度は年長の砂場ではなく、広い園庭の砂場で数人が大きな穴を掘っていました。その帰りにF男「先生、あそこは温泉じゃなく、下がコンクリートだよ」と。

穴を掘り続けること、何を目的にしているのか、どこまで掘り続けるのか、片づけになると、子どもたちは作業を終えて帰ります（掘ることにロマンがあるのかな…）。

年長児にとつて明日は卒業式という日。寸暇を惜しんで砂場に行つてると思つたら、汚れることを好まなかつたD男と、生き物好きのB男たち五、六人がまた穴を掘つています。それもそれぞれに自分の穴を一生懸命に掘つています。「先生見る？　ぼくの穴」「ぼくの穴これくらい入れるよ」「Bちゃんの穴には水がだいぶたまつてきてるんだよ」「ずっと奥まで掘りたいなあ」「本当に温泉がわくかも」…。

時々、側にいる私に話しかけながら、掘り続いている子ども達。そういえば、どこかにこんな穴のこと描いた絵本があつたなあ…と思いを巡らせながら、穴を掘り続ける子どもたちを見ていました。いくつもの時間と空間の中に生きながらしっかりと歩んでいる子どもたちの姿にたくましさを覚えながら…。

### おわりに

六月の砂場から溢れ出ている水を見てひかれたことも、そして三学期が終ろうとしているこの時期の感動も大事に思います。はつきりとは説明できないけれど、子どもたちと同じ瞬間を生きたことを、そして、感じ合えると、その瞬間の中に私がいたことの意味を私は考え続けます。きっと子どもたちは、意識はしなくとも、その一つひとつ瞬間の中で、自信を持って進んできているのだと信じています。



「……」もくもくと、それぞれに。ぼくのあな。

汚れることを好まなかつたD男が、「ぼく、幼稚園で一番楽しかつたのはね、砂場！」としつかり私を見つめながら話したその姿。それを伝えたD男の描いている世界を思うと、また心が動きました。

保育者が心を動かす瞬間が、子どもの時間と空間の中に繋がつていくこと、それは、きっとおだやかな保育の空間と、ゆるやかな時間の流れを生み、生きようとしてる子どもたちを大きく包んでいくように思います。慌ただしい社会の中でも、こんな風にひきつけられるものと心動かせる瞬間を感じられることを、子どもたちの側にいる大人が後回しにしないで見つめて続けていられることが、きっととても大切なのだと思ったのです。

(山口大学教育学部附属幼稚園)